

会報

道南

No.24

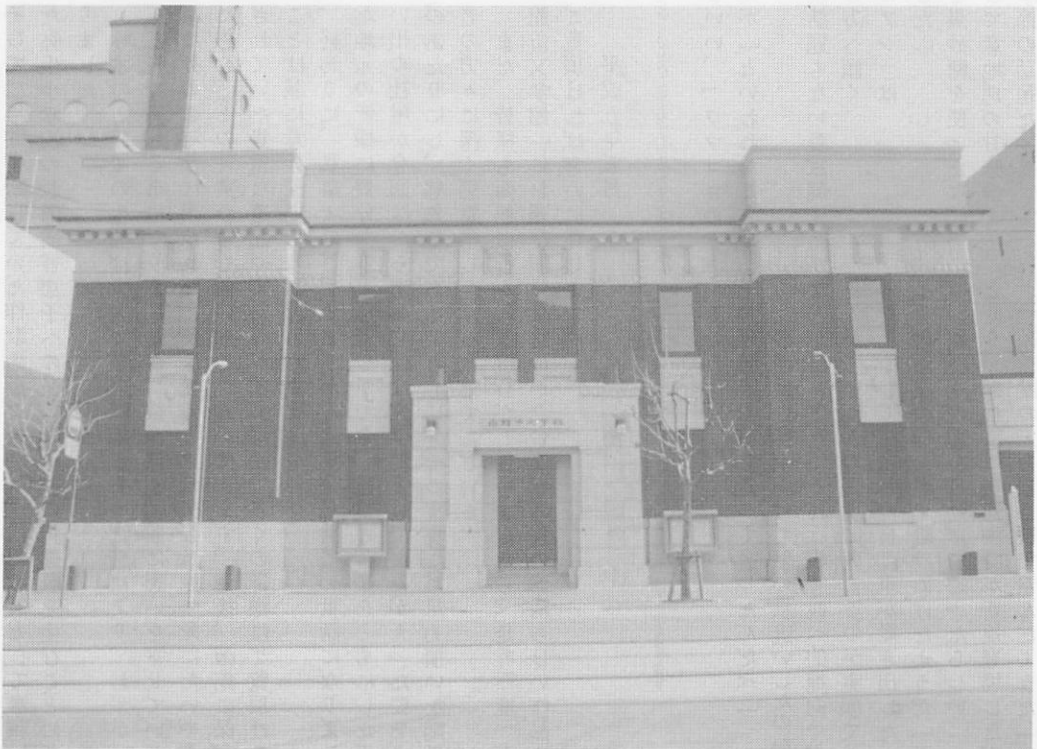
平成5.7.20

函館市文学館

山根 要

平成五年四月一日、函館市末広町に石川啄木、亀井勝一郎、久生十蘭ら函館ゆかりの作家十六人の作品、遺品等を展示した「函館市文学館」がオープンいたしました。それに先立ち行われました開館記念式典にお招きに預かり木戸浦函館市長をはじめとする関係者の方々や、石川啄木のお孫さん等のゆかりの皆様共々、文学館を見学させて頂く機会を得ましたのでここで皆様にご紹介申し上げます。

「函館市文学館」となりました建物は大正十(一九二一)年に建築された、鉄筋コンクリート三階建ての建造物で明治・大正の古き良き街並が残る西部地区に位置しており、その保存価値の高さから平成元年三月には市の歴史的景観形成指定建築物に指定されておりました。ながらく、私ども株式会社ジャックスが本社社屋として使用しておりましたが、平成元年七月に当社の創立三十五周年を記念致しまして文化振興に役立てて頂くべく函館市に寄贈申し上げ、それを受け、函館市が市政施行七十周年記念事業の一環として七億円の巨費を投じ内部改装等を行い今般開館に至った次第でございます。これからは、西部地区の新たな観光名所として大いに期待されるところでございます。函館の地は安政六(一八五九)年、横浜・長崎と共にわが国最初の



国際貿易港として海外に門戸を開き、西洋諸国の文化の影響を受けながら発展、モダンな生活の営みがなされてまいりました。当然多くの文化人たちが往来し、函館を舞台とした文学作品が数多く生み出されました。

「函館市文学館」はこのような函館ゆかりの方々の作品等を展示し一般の方々に広く知っていただくとともに、資料の散逸防止を図り、文学者達とその作品を永く後世に顕彰し語り継いでいくことを目的としております。

同館の一階には函館市生まれの作家達、時代小説「鈴木水主」で直木賞を受賞した久生十蘭、名作「大和古寺風物詩」の亀井勝一郎、林不忘のペンネームで「丹下左膳」を世に出した長谷川海太郎と弟の長谷川四郎等の直筆原稿や著作が、また、函館市とゆかりの深い井上光晴や今東光、日出海兄弟等の資料、さらには、現在も活躍中の森本貞子、辻仁成の資料等が展示されております。

二階全体は函館でめざましい活躍をし、今日でもその作品が広く親しまれている石川啄木で占められております。二十一才で、故郷を後にし、函館の地にたどり着いた啄木は、このとき温かく受け入れられた様子を「新しき友と海とは我を慰むること多し。」と記しています。

思出が飛翔して

大原 孫七（大野小）

。砂糖屋の上空を飛ぶ

私が（北海道庁立大野尋常高等）小学校低学年の時分、田植や七夕などに餅をついたり饅頭をつくったりして隣近所の間でヤリトリする風習があり、子供にはお駄賃が楽しみだ

そして二年間中断していた作歌活動を再開し、代用教員として奉職した弥生小学校の教師橘智恵子への淡い恋は後の相聞歌を生むことになりました。

啄木の函館での生活は大火で家や職場を失った事により、わずか一三二日で終わる事になりましたが、彼が深く函館に思いを寄せていた事は死の数年前に書かれた「僕は死ぬときは矢張函館で死にたいやうに思ふ。」との言葉からも伺い知ることができます。死後、函館に保存されていた貴重な遺品や資料等が本文学館で多くの皆様にご覧頂けることは誠に意義深いものと思われます。

終わりに、私事ではございますが、永年公私共にお世話になりました地元の皆様に幾分なりと恩返しができ、社員と苦楽をともにした思い出の社屋が今回はならずも立派な文学館としてよみがえった姿をまのあたりにし、感無量であるとともに、その実現にご尽力頂いた関係者の方々に深く感謝申し上げます。

また、皆様も函館に行かれる機会がございましたら、是非一度「函館市文学館」にお運び願ひ函館ゆかりの文学者達の素晴らしい作品をご覧頂ければ幸いに存じます。

平成五年五月

った。駄賃を「ウマ」といい、「ウマコさのせる」とか「ヤセウマだが」といわれたことが思い浮かぶ。

始終顔を合わせ、格別話題もない農家同士だからつい話が配り物の方へ傾く。

〇〇（屋号か通称）のアンコは
「一寸白砂糖の味がした」

「利きをよくしよう」と黒砂糖を使ったな
といった調子だが、決して意地悪の甘味評ではなく、いわば例年の季節の話題だった。

そのうちに

「砂糖屋の前を走って通ったんだべ」

「砂糖屋さ背中向けて蟹の横這いしたのか」

などが出てきた。それは頓智競べ的趣向で、各人が思いつきの表現に興じるのが実態であった。そして江差行の自動車動き出したら、

「砂糖屋の前を馬で駆けぬけたようだ」が
「砂糖屋の前を自動車で通ったらしい」

と変り、ざれ言に交通機関が新規登場したが、
「砂糖屋の上を飛行機で飛んだようだ」

が出る前にヤリトリの風習がふっと消え、ざれ言も聞けなくなった。爆音を頼りに遙か上空の小さな機影を探し求めた頃のことだった。

(一九九一・七)

。「カラオケ」(空桶)

小学校の一年一学期私は唱歌が乙だった。教師(全科目担当)が「誰かうたえる者は」と挙手をさせ、数名宛を勝手にうたわせた。曲目も伴奏もヘチマもない。調子外れであろうと大きな声さえ出せば「元気があってよろしい」。鐘が鳴るや否や「他の者も早くうたえるように勉強せい」でチョン。それが唱歌の授業だった。忘れもしない。一学期末にこの教師がオルガンを弾いて一人宛全員に「君が代」をうたわせた。この教師のオルガンをきいたのは後にも先にもこれ一回、その人に一二年、五年と担任されたのだった。

私には進んで手を挙げ人前でうたうなど思ひも寄らないことだった。生来のもので教師のセイではなかった。

「カラオケ」の出現時期を覚えていないが兎も角私にとって救いの神だった。「その唄を知らない」といえばバス、宴席で無理強いされない。便利重宝というか「カラオケ」様さまだった。

ところが先年老人会へ入ったら例会場にてんと「カラオケ」が据えてある。毎月ノドに

覚えのある人達がうたい、踊りも出る。握ったマイクを死守せんばかりのキグチコヘイ流から、老人施設を巡回して他流試合に励む武者修行型、「カラオケ」を積んで車をはしらせ鍛錬に努める密練派等多様多彩といったらいいか多士済々というべきか!!

それに引きかえ私の方は、「老人クラブみんなの歌集」(全労連編)を買わされはしたが、辛うじてうたえるかも知れないのが四分の一強。

童謡唱歌 二八 うち 六

歌謡民謡 四〇 一二

計 六八曲 一八曲

「カラオケ」に救われて内心喜んだのも束の間、今やわが「空桶」の影に脅える身と相成った。

「唄を忘れたカナリヤ」なら可愛気もあるうが「唄を知らないカナリヤ」では「ニャン」とも泣けない。

(一九九一・八)



函館の芸人アラカルト

梅田良太郎



イ、ン、デ、ナイ、カ、の寛容な風風を持った函館の市民達は伸び伸びと暮しをしていた。道内奥地へそして樺太各地の物資の供給基地である。それに加えて渡島の港は魚の豊漁で函館の港はごったがえすほどの賑やかさであった。今は其の面影は失せて終った淋しい限りである。

さてそんな函館から知識人、学者、実業家が続々と誕生したが今回は函館の芸人に絞って書いてみた。映画、演劇で有名な子役の高峰秀子がいる、認められ上京し東海林太郎の養女となり映画界入りするのである。

戦争直後のカルメン故郷に帰るは、ト、キ、キ、であり、カラ、イ、であった。彼女の美貌と演技の上手さは見事であり楽しい映画であった。

彼女以前に映画、軽演劇で世間をアツと云わせた喜劇王高勢実乗がいた。

ア、ノ、エ、オ、ッ、サン、ワ、ン、ヤ、モ、ウ、カナ、ワ、ン、ワ、の台詞でメークアップした大きな眼の顔が今でも忘れられない、爆笑したのである。進藤英太郎は映画の敵役として悪役に徹

していた。名優の一人である、十字街にあって三浦藤金物店の息子と聴いた事がある。

次に益田喜頓について少し書いてみたいのである。現在函館市の名譽市民である彼は函館をこよなく愛し演劇の上でも函館弁の訛りを捨てなかつたボードピリアンである。笑いとベーススを持つ数少ない名優の一人である。

戦前の浅草六区は新宿のムーランルージュ、有楽町の有楽座、日本劇場と張り合っていた。浅草には笑いの王国、常盤座、カジノフォリー、ピカデリー等の軽演劇ストリップ小劇場があつた。

当時のアメリカ喜劇界のチャリィチャップリン、ハロルドロイドそしてバスターキートンが喜劇王を競っていたが彼の顔は何かバスターキートンに似ていると云うので益田喜頓と云う芸名がつけられたのである。

あきれたボーイズの坊屋三郎の弟であつた芝利英と北海中学時代同級生だったからか彼の推めで浅草へ旅立つたのである。地球の上に朝がくる、その裏側は夜だろう……坊屋三郎、芝利英（故人）、山茶花究（故人）に益田喜頓の四名のあきれたボーイズは浅草の人氣を独占した、彼は風貌からして芒洋とした、目立った動きをしない役者だった。ハワイアンギターを弾きながらグループの一員として活躍していた。目をパチパチさせるだけで観客はドットわいたものである。エノケンのように体を張って笑いを誘うのではなく、だまって立っているだけで笑いになる人であ

る。名俳優だと思う。マイフェアレディに於けるピカリング大佐の役は彼の個性溢れる俳優として見事に大役を果したのである。大好評を受けた森繁久彌も彼を賞して「彼の顔そのものが芝居になる」と言わせている。イ、イン、デ、ハ、ハ、そのものである、彼は無欲なスターとしても有名である。

三橋三智也は当時熱情的なファンを持った演歌歌手であつた。巴小学校の卒業生でもあ

る。上磯の近くの田舎で生れた彼は子供の頃からヤン衆達の唄う民謡をよく聴かされていた。

当時は子供の頃から民謡を習わせる家庭が多かつた。たまたま巴座で行われたのど自慢コンクールに応募し一位になつたのである。

人のすすめもあり上京して歌の勉強に入ったが彼は別のことを考えていた、大きなホテルの社長になる事である。網島の温泉旅館に勤務し学資をためて神田の明治大学を卒業すると歌手として華やかにデビューをしたのである。今熱海のホテル三橋の社長になつている。

二年前に面接したが仲々元氣である。北島三郎は現在最も活躍している歌手である。彼の唄は北海の海へのひたむきな想が込められてゐる。デビューして間もなく函館の人が発表され道南の人達に快哉を叫びしたのである。昭和三十五年頃まで新橋、四ツ谷、銀座で流しをしていたので小生も何処かの飲み屋で逢つたかも知れない。私も新橋あたりで仲良くしていた流しの繁ちゃん（故人）から

『さぶちゃんは努力家であり流しでは私の後輩だが彼には及びません。特に唄心のとらえ方とテクニクは最高だ』と評していた。今北の大地がヒットしているが彼の歌の中でもベストに入る歌だと思ふ。

さて次に瀬川伸について触れてみたい。彼は瀬川映子の父であり唄の先生でもある。

函館商業出身の彼は在学中から美声の持ち主で放課後講堂で歌の練習をしていた。声楽の勉強ではなく流行歌の東海林太郎や上原敏の唄である。彼は同時に陸上競技部のハイハイドル、棒高跳の選手でもあつた。施延男が本名だつたと思うが私と陸上競技部を通して対抗戦で何度か競争した覚えがある。戦後間もなく空蘭に出張した時である。映画館前にコロンビア瀬川伸来たる!!と看板が出ていた。

施の芸名かと思ひ乍ら入場した。まさに彼である。旅姿でまたたび物の唄を、続いてマドロスパイプをくわえ、水兵姿で港町シャンソンを歌っていた。彼の成功を祈つて劇場を後にした。五十年ほど経つた今彼がまだ生存しているのを知つた。瀬川映子を通して伸さんの長寿を祈る昨今である。

ここまで書いたのならこの人を紹介しよう。三浦洗一は神奈川県茅ヶ崎にあるお寺の子供だつた。恵まれた土地に生れた洗一は音楽学校を卒業後歌手としてデビューした。彼は何故か函館の人情や土地柄に魅せられて十数年前から函館の湯の川に住んでいる。私は十年ほどまえにディックミネからこんな話を聴い

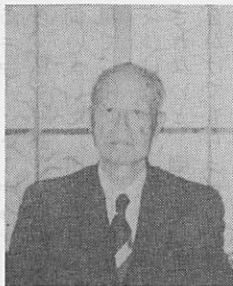
た事がある。

”僕のことをとかく言う人がいるが洗一のモノは僕のモノより数倍素晴らしい、色、艶とも最高だヨ。”
可成りのモノのようである。ミネを感嘆せしめた男である。つい先頃NHK特集で洗一の影像が写し出された。得意の踊子である。直立不動の彼は若々しく頼もしい歌手である。彼の顔が魚のカスベに似ていることから私達は彼のことをカスベとよんでいた。現在湯の川温泉花びしの社長である。
女将は幸せな満足した日々を送っているだろう。イインデナイノ……

(一九九三・五・一〇)

六十二年振りのクラス会

浅野 増太郎



といふ話が持ち出された。

当時の六年生は、男子二クラス、女子二クラスがあって、男子は教室が隣合っていたの

去年六月初め、

函館にいる友達から、千代ヶ岱小学校・昭和五年卒業の男子一組・二組合同のクラス会をやるうではないか

で比較的交流があった。

何分六十二年振りに初めて開くクラス会なので、案内状の宛先には苦労した。中学や商業校に進んだ人の住所は、各校の同窓会名簿を活用させてもらったが、その他の人の手掛りを掴むのには、地元函館では新聞紙上を通して呼び掛けた。私は数年前に道南会の集まりに出席した折、たまたま同じテールで会食した人と懇談中、その人が、函館工業高校昭和十年卒業である事を知り、当時の卒業名簿のコピーを送ってもらったところ、仙台市に級友がいる事がわかった。私が早速案内状を差し出すと喜んで出席すると返事が来た。六十二年振りに級友の消息を知る事が出来たのは、実に道南会のお蔭でした。

その日七月十一日、集まった生徒が十二名と、三年生の時の担任磯部トミ先生(現姓福岡)、五年生の時の担任吉田寛先生もお元気で出席して下さい。お二人共八十歳を超えておられた。

吉田先生は函館にお住まいですが、磯部先生は現在東京杉並区にお暮らしで、毎年七月、八月、九月は函館でゆっくり過ごされているそうです。

何分六十二年振りの出会いなので、体や顔つきも変わっていて、街ですれ違っても気が付かない位でした。

しかし先生は、各人をフルネームで覚えておられ、更に驚いたことに担任でもなかった隣の組の生徒の名前までも知っておられたの

には心から敬服させられた。

三時間余りがアツという間に過ぎて、心残りでしたが次回を約して別れた。

後日、中学時代の友人(プロの写真家)が卒業時の写真と桜田校長先生を中心とした全先生の写真を引き伸ばし、複写して出席者全員に送ってくれた。

今年、八月も先生をお招きして二回目の会合を計画している。その折写真を持ち寄りこれは誰れ?彼はどうしているだろうか?と、話が弾むに違いない。又当時の校歌の歌詞も入手したので、昔は意味もわからず、夢中で歌っていたが今度は、じっくりと意味を噛みしめながら、合唱しようと今から楽しみにしている。

遠い思い出

帆刈 幸子



私が「道南会」に入れて頂いたのは、昭和三十七年九月の臨時総会の席でしたから、もう三十年以上も昔のことです。

函館での知人を訪ねて銀座にあった山一証券ホールにお邪魔した日のことは、亡くなっ

た田辺三重松先生や阿部良平さんの懐かしいお顔と共によく覚えていきます。昭和三十五年に出来たという「道南会」は、数寄屋橋にあるニュー・トーキョーが定例の会場でしたから、私も阿部さんに頼まれてよくお手伝いに伺いました。出席会員へ配るお土産作りが大変で、仲々食事もとれない位でした。ニュー・トーキョーの係の女性から「早くお食事をされないと、倒れてしまうわよ」と優しく声をかけてもらったのも屢々でした。沢山のお土産袋をそろえて一安心して午後三時半頃、一階へおりて交互に食事をとりませう。再び会場へ戻るとビールやお酒の手配を確かめたり忙しくなる受付を手伝ったりしていると、亡き田辺きみ奥様が「もうお席に着いて一息入れたらいいでしょう」と、色々気づかっ下さいました。でも私は、各テーブルを回りながら、この方とこの方はご一緒のテーブルがいいとか、その人たちのお話し具合などを考えてご案内したものです。水戸に在住の臼井百合子さんと二人で一生涯お世話したことが思い出されます。それにしてもお土産品集めは、阿部さんと息子さんの良吉さんもあり出されて本当にご苦労さまでした。

「偽道南紙事件」があって組織が改正された昭和五十三年二月からは、今の「日本工業倶楽部」に、会場が移りました。

和田さん、山下さんという立派な会長さん方のお世話によるのですが、東京駅前につくクラシクな建物は実に素晴らしく、戦前

から上流社会の結婚式はここで行われたと聞きました。私も大好きなこの明治調のビルで、新年総会が開かれ、夏季懇親会は都内の他のレストランや料亭でとその都度趣きのある設営はまた楽しいものでした。何年前か、「全国市町村会館」の一室で、当時の柴田市長を囲んでお話をする機会がありました。私を含めて五人の出席者でしたが、私は、「道南会」で柴田市長ともお顔馴染みでしたからリラックサスさせてもらいました。

この他にも、「ミスはこだて」「三名と連れ立って日劇前の繁華な人通りで、「函館観光」のPRを盛んにしたりしましたが、車に弱い私は残念ながら晴海会場には出かけられませんでした。また新築の函館市役所庁舎訪問にも参加してよい記念になりました。頂戴したうれしい記念品は、今も大事にわが家の宝となっています。話が前後しますが、昭和三十八年二月の新年会には、九重親方（元横綱千代の山）が出席され、大きな体の大きな手で握手させてもらったのが印象に残っております。

会合でよくご一緒した画家の宮本武雄さんが昨年一月亡くなられたのはショックでした。先日奥様がお便りを下され、「娘のいる英国で暮らすことにしました」と、お知らせを頂きました。今頃は、お家族で日本のお話をなさっておられることでしょうか。どうかお元気で過ごしてほしいと私は願っております。

女性経営者の栄光と挫折

山田道子

「女性社長」という言葉のひびきは、強面の女と、キャリアウーマンの華やかさを合せ持つイメージがある。

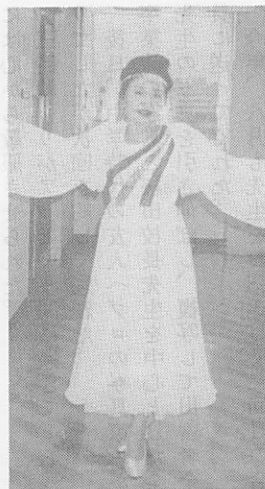
思いもかけず零細企業の社長職を引受けざるを得なかったのは、授けられた使命としか思えない。副でいた場合とは全く違う重責を伴うもので、オーナー社長とは、かくも苦しく切ない立場とは思わなかった。

まずは前社長の未決済の仕事の片付けから始まり、その量をこなすのに疲れてしまう。

女性であるハンディはなかなか越せないし、かといって女性だからといって甘えさせてくれないのが世間のきびしさである。

男性半分女性半分の生き方を強いられるの結果となるわけだ。

仕事を引継いだ時は、かなりの自信があった筈が、急速なバブルの崩壊という大波を被



ったばかりに、荒海に浮ぶ小舟のような危機に類し、計画は崩れ去るかにみえた。半ばあきらめかけ、かなり不安感を覚えたのに、永い間の夢であるせいかくの計画を何とか成功させたいとの必死の思いで、理想のビルを建ててしまった。これには後悔はしていない。イタリア好きの自分のデザインを取入れて貰ったクラシカルでモダンなビルは群を抜いて目立ち、行動はしやすく、満足感を覚える。だが現実には甘くない。

不況の時代の中での苦境を乗り切るのに頭をフル回転させているうちに空しさを覚える。ビルの空室過剰で駅直前の優位の場所であるのにも拘らずふさがらない現実である。目的を達した時、次なる目標を掲げてゆかなければ挫折してしまう心境である。

他人は建物を見て「素晴らしいですね」とほめてはいるが、内情は大変なのである。自分の理想と現実の谷間で悪戦苦闘する。友人達は何を今更苦労するのかと苦言を提すが、しかし自分が育てた会社と、新しい建築物は我が子そのものであるから愛着がある。やめて売却して楽な余生を送ればとも云われるが、我が子を他人には渡したくない心境と同じである。

何はともあれ自分で選んだ道は自分で行けるところまで行かねばと思ひ頑張っている。かといって年はとっても女性は女性であるから周囲は大切にしてくれる。ここに女性経営者の喜びと苦悩が現在の立場に釘付けにするのである。

ビルのオーブニングに歌った左記の歌詞は自分の気持ちを代弁していると思うので苦しい時は口ずさんでいる。

歩いてても歩いてても歩いても歩いても振りむかず 振りむかず 振りむかず
それしか出来ない私の生きざま
負けない負けない誰にも負けない
貴方の匂いが私にはある

流されて流されて流されて
立ち止り立ち止り立ち止り
休むことさえ出来ない人生
負けない負けない誰にも負けない
貴方の匂いが私にはある。

一九九三年四月

私と音楽

伊藤欣子(常盤)

音楽との触れ合いは、オカッパ頭の五、六歳の頃です。当時の流行歌がラジオより流れ



ると自然に口ずさんでいた事を思い出します。「君待てども・夜のブラットホーム・お使いは自転車に乗って」などの歌です。特に好きだったのは、ディックミネの歌でした。情感あふれる甘い大人の歌が好きで、一日中歌っていたように記憶しております。

小学校時代は音楽部に入り、ラジオ放送にも出演しました。常盤小には葛西先生と云う男の音楽の先生で、自作の雄大な合唱曲など指導されたり、オルガンなども弾かせて頂きました。私の実家は網元でした。父母共に、浪花節が好きで、来客時には、ゼンマイ式の蓄音機で「虎造の森の石松や、津軽のジョンガラ節」のレコードをかけ、酒を振舞うのが買手家流のおもてなしでした。

そのような環境の中で育ったにもかかわらず私はクラシックの方向に傾いていました。根っからの歌好きなので、どんな音楽も嫌いではありませんが、クラシックの歌が一番性格に合っているようです。

庁立高女時代は、音楽の根上先生、函中の酒井先生の影響をうけて、オーケストラや、ピアノのレコード鑑賞、教本のコンコーネによる授業で、歌曲の基礎を学べる音楽の時間が一番好きでした。音楽の盛んな学校でしたので、校内コンクールや、音楽会が開かれ、時々歌わせて頂きました。夢は音大に行くことでした。女の子の憧れの宝塚に行くように熱心に薦めてくれる友人もおりました。

学生時代に団体徒手体操で国体選手にも選

ばれたので、音楽と体育ダンスを結びつけての事と思います。卒業時に先生より音大を薦められ進学の積りでおりましたが、思いがけない母の猛反対に合い、何故か素直に進学をあきらめたのでした。母は都会が嫌いで「東京は恐ろしい所」と云うだけの理由で、娘が一人で都会に出る不安を感じたのだと思います。高校が共学になる時でさえ「学校を止めさせる」と云った位、古風な考えの母でした。二人の姉が嫁いで私一人でしたので、心配な気持と淋しさがあったのだと思います。

親がその様に反対なら悲しませてまで行かなくとも歌は歌えると至極あっさりとしたものでした。その代りとして、自由に好きなことをしても良いと云う条件にしました。

卒業後の私は彌生ドレスメーカーに通いながら、社交ダンスで音楽にのって踊る楽しさを覚え、フアッシュョンショーに出演を依頼されたりと、青春を欧歌しておりました。

西高時代に代表二名が函館放送局に出演したのが縁で（一人は東京芸大を卒業し、現在札幌藤女子大教授の相原宗和氏です）ニュースの合間にラジオ歌謡を流したり「函館と青森を結ぶ歌う連絡船」と云う番組で歌ったりと、楽しい時間を過ごしておりました。

今は亡き菅原憲明先生に可愛がって頂き、放送のノウハウを教わりました。その時のミクシングの担当者が、現在の主人です。その様な経緯から、今だに歌キチの私の我儘を許してくれています。―感謝―

其の後子供が生まれても歌が止められず、主人の転勤に伴ない、旭川と札幌の放送合唱団に入り、コーラスを続けて現在に至っています。当時、子持ちのオバサンは私だけで、休まない真面目な人との定評がありました。

定演とか共演の第九交響曲出演で、大忙しの日々でしたが、二人の子供達も歌の熱意？を感じてか協力的で助かりました。

夜の練習のため、夕食の仕度をして出掛けるのが大変でした。

今にして思うに、なつかしい時代でした。その様な状態のもとで続けて来たことが現在につながり、ボケ防止や、ストレス解消などに役立つとかで、下手の横好きで、トステイのイタリア語にも挑戦している此の頃です。

現在所属の女声コーラスグループは平均年齢六十五歳の歌大好き人間の集まりで、人前では発表をせず、歌が出来上ると年に一回だけ、自分たちのために、テープを吹きこむだけで満足しているグループです。

合唱のテープの数もふえて嬉しい限りです。私のモットーは、上手とか、声がきれいとか賞められるより、品格のある歌い方、心を打つ歌い方とか云って頂けることが、嬉しいのです。

年を重ねるにつれて、音楽に対する考え方も謙虚になるようで、例え、素人でも常に、前向きに研さんを積み、トレーニングを怠ってはいけないと思っております。

以上が私の音楽に対する考え方と、私の歌

の歴史です。

写真は昨年の還暦の時のので、札幌の娘より贈られた真赤なトレーナーを着、抱えてる花は、息子夫婦よりプレゼントされたものです。

新聞コラムの楽屋裏

朝倉敏夫

（読売新聞論説委員、万年橋小）



丸谷才一の「女ざかり」が、ずいぶん売れたそうだ。新聞社の女性論説委員を主人公とする小説である。

「論説委員って、なにをする仕事？」などと聞かれることも時々あるから、そんな質問を受けることが少しは減るかもしれない。

要は、社説を書くのが仕事である。ただ、この小説に出てくる論説委員会は、少なくとも読売新聞論説委員にとっては、ひどくリアリティーに乏しい。

なにも、読売新聞には女性論説委員がいな

いから、という理由によるわけではない。論説委員会の社内組織上の位置づけ、論説委員の身分、人数、運営の仕方、社説と新聞編集方針の関係等々は、新聞社によって、か

なり異なる。通信社の論説委員会なら、もっと性格が異なる。

例えば、読売新聞にとっては、社説は「社論」だが、そうではない新聞もある。大手新聞といわれる中にも、昨日の社説と今日の社説が、それぞれ違う方を向いた論調になっていたりするところがある。

だから新聞社によっては、この小説にも多少のリアリティーがあるのかもしれないが、読売新聞の社説が、こんな安易な作成のされ方していると読者に思われたら、迷惑だなア、と感じている。

小説の中で一つ、妙にリアリティーがあつて、クスッとさせられたのは、コラム担当の論説委員が、「そのネタをこちらにもらいたい」と言うところだ。

どの新聞にも朝刊一面の下の方に横長コラムがある。朝日新聞なら「天声人語」、毎日新聞なら「余録」、読売新聞は「編集手帳」である。それを毎日々々書かなくてはならない専任コラムニストのテーマ探しの苦勞を、いつも横から見ているからだ。

そうした苦勞は、毎日読んでいる読者の方にも容易に想像がついているだろう。が、実はこの欄担当のコラムニストは、読者のほとんどは気がつかないだろうと思われる苦勞もしている。

それは、このコラムでは、文章の切れ目に黒菱形（「◆」）を入れていたことだ。新聞によっては、黒三角や、逆三角だったりもす

るが、その位置が問題だ。「◆」が行の一番上にきてもいけないし、一番下にきてもいけない。「◆」と「◆」の間隔もほぼ同じ行数になるようにするのが作法である。

それがいかに大変なことか、実際にやってみて初めてわかった。私は政治記者の出身だから、普段は政治関係の社説を担当しているが、専任コラムニストの休日などに、代打ちとしてこのコラムを書くこともある。

ところが、文章を書くというよりは、まるでジグソーパズルをやっているみたいな気になってしまう。一語増減するだけで、たちまち玉突きみたいに全体の「◆」の位置が変わる。「◆」だけではない。受けカッコや、句読点が一番上にこないようにもしなくてはならない等々もあるのに、玉突き効果はそれらにも及んで、全体がガタガタになる。

そんな操作で、ひどく消耗してしまうのだが、専任のコラムニストは、時には、それを楽しんで見るようにも見えるのだから、感服してしまふ。読売新聞の夕刊コラム「よみうり寸評」の担当者などは、「今日は、富士山の話題なので、『◆』の位置を山の形に配置した」などといった、エツに入ったりしている。他社のコラムで、黒三角が横一線に位置しているのを見て、「ハハア、遊んだナ」とニヤリとさせられたこともある。

どの新聞の責任コラムニストも名作家ぞろいだが、こんな制約をもこなした上での名文なのだと思う。読めば、またひと味ちがった

興味も感じられるのではないか。

「紅白歌合戦」初出場顛末記

相馬 正樹



昨年十一月末に「ツルの渡り」研究の関係者の打ち合わせ会と忘年会を兼ねた会合で、「紅白歌合戦」に出てみないかとい

う話が出た。それは「日本野鳥の会」の会員として、観覧席で揚げる赤と白の団扇の数を数える役だと言う。歌手としてデビューするとか審査員として出演するのなら願ってもないチャンスだとは思ったが、私は野鳥の会の会員でもないし、大衆の面前にさらせる顔でもないし、どう考えてもテレビの画面でアッブに耐えられる自信はない。この期に及んでまで恥をかきたくないからという気持ちもあつたので、引き受けることを躊躇した。

しかし同席の野鳥の会の役員の方からの薦めもあり、また当日のバード・ウォッチングの衣装から靴と双眼鏡まで全部支給致しますし、野鳥の会の会員の入金金・会費も免除致しますからということである。そんなにいろいろ配慮して頂けるのなら、少しぐらい恥を

かいても良からうと、君子が欲にからんで豹変し快諾してしまつた。

早速十二月八日にリハーサルがあるからというので呼び出された。それは三千人あまりの観衆との合同のリハーサルで、観客は紅白の団扇を揚げる練習を繰返し、野鳥の会の会員が舞台正面に出て一列に並び、その紅白の団扇の数を数える練習をするのである。NHKホールの各階を三つのブロックに分けて、一ブロックを男女それぞれ紅白のお仕着せを着た二人で数えるのであるから、合計十八人になる。多いブロックでは二人で四百人を一分間で数えなければならぬ。二階から上は双眼鏡で覗きながら手動式のカウンターで数えるのだから、一秒間に少なくとも三回以上親指を動かさなくてはならない。私を除いては鳥を数えるのはお手のもの、ベテラン揃いであるのに対して、私はついぞカウンターなるものを手にしたことがないズブの素人である。

それから私の苦闘が始まつた。まずカウンターを買ってきて混雑する街頭や駅などの人込みの中に立って人数を数えたり、親指を早く動かす練習をする。また実地訓練のために上野の不忍ノ池に出かけて泳いでいるカモを数えるなど、涙ぐましい努力が続けられた。

遠くのを双眼鏡で追うには余程上手に操作しないと視野が狭いのでダブって数えてしまうこともしばしばある。まして、突然に始めた一夜づけの腕では、一秒間にカウンタ

ーを三回平均で押すのは到底無理なことが分かつた。そこで当日は一番人数の少ない一階の中央席二四〇人を割り当ててもらふことにした。そうすれば紅白同数でも一二〇人を数えれば良いことになるからである。自分の腹づもりでは、六対四で白が負けるとすれば、こちらはせいぜい一〇〇人ぐらいを数えればよいことになるから、それなら何とかなるだろうと思つてゐた。しかし結果は全く反対で、こちらが二〇〇人を数えなければならぬことになつたのであるが。

遂に大晦日がやつてきた。ここまで追い詰められれば、あとは開き直るしかないと思つて決めてNHKホールに出かけた。午後五時集合で、出番は十一時四〇分からであるから入場して六時間も待たされることになるが、晴れの舞台に出るためにはこれくらいは耐え忍ばなければならぬ。

すぐ控え室に案内されて支給された衣裳を試着し、細かいタイムスケジュールを聞かされた。衣裳は野鳥の会のバード・ウオッチングに相応しいトレーニング・ウェアの上下で、男性は白、女性は赤に色分けされたものであり、靴までがお揃いである。これを着て首から双眼鏡を掛けて左手にカウンターを持ってば、結構さまになる。ステージに登場するのは、男女十八人が九人ずつ別れて左右の袖から出ることになる。幸いにも私は舞台下手から登場し、総司会山川アナウンサーの右に立つ石田ひかりの右四人目に並ぶことになつ

た。審査員席の正面であり、私の担当するブロックの前で、最も目立つ位置に指定された。こんな場所ではとっておきの顔をしなければみっともないと、商売柄壇上に立つのは馴れているはずだったが、心なしか顔がこわばる思ひであつた。

やがて十一時半、舞台下手でも入念な打ち合わせをして登場を待つてゐた。山川アナの「それでは日本野鳥の会の方々に登場して戴きましよう」という声を待つて小走りに登場することになつてゐたのが、そんな声が聞こえないまま、突然に「早く、早く」と言う声に促されて駆け足で登場することになつてしまつた。とても気取つて良い顔をする暇なんかはない。

さらに運悪く、我々列の後ろについて登場して後列に陣取るはずのチェヤールが、フェナーレで出場した歌手全員が前に出過ぎたために、間に割り込む余地がなくなつてしまひ、最前列に出てしまつた。そのために、私の前に大きな数字の表示板が立つて、肝心の私が隠れて客席は見えなくなつてしまつた。どうしようかと戸惑つたが、「それでは、紅組が良かったと思つた方は赤、白組が良かったと思つた方は白の団扇を上げて下さい」というアナウンサーの声に、客席は紅白の団扇で埋め尽くされた。もう左右ではカウンターが始まつてゐるのに、目の前の表示板は動こうともしない。慌てて横にまわつて顔を出して見たら、少ないはずの白扇の数が圧倒的に多い

のにビックリして、夢中でカウンターを押した。白をあげた人数とは関係なく。一五〇ぐらいにはなつたろうという頃合を見計らってカウンターの表示を見たら、なんと八〇としか出ていない。少なすぎると思ったが、一旦計数をやめて表示を読み取ったからにはもう追加はきかない。この数字を打ち合わせ通りにチェアーガールに伝えたから、そのまま集計され表示されてしまった。

われわれの数えた人数を集計し終わったところで、「野鳥の会のみなさん有難うございました」の声で正面に向かって一礼して退場という手筈になっていたので、そのアナウンスを待っていたら、既に退場が始まっている慌てて一礼する間もなく小走りに退場してしまつた。この間たったの数分間である。

終わってから私とペアで紅を数えた女性のカウンターには、四〇人としか表示されていない。彼女が数えた人数が正しいとすれば、こちらは少なくとも二〇〇人を数えなければならぬ筈である。残りの一二〇人は私の手でどこかえ葬り去られてしまったことになる。このあやまちは、私の心の痛手として永遠に消え去ることはないでしょう。

長年の教師生活の終わりに、降って湧いたような空前絶後のハッピー・チャンス。清水の舞台から飛び下りた積もりで出場した初出場の晴れの舞台がこんな結末に終わった。何とも心残りの多かつた中に、最後に催された紅白に出場した芸能人が出席する打ち上げパ

ーティーに参加できたのが、せめてもの慰めであつた。

新旧入り混じつたお馴染みの歌手たちと歓談する中で、車椅子にもたれて出席していた藤山一郎の姿が目についた。そこには「青い山脈」を歌つた往年の面影は見られず、場内に流れるバックグラウンドのメロデーも、心なしか歌謡界の世代の交替を告げるレクイエムにも聞こえた。

お知らせ

いまだ道南会の恒例の行事は、新年総会と夏の懇親会と二つの会合をもつておりますが、今後ますます皆様との親睦を深めてゆくために、いくつかの部会をつくって活動して行たいと思っております。

例えば、囲碁大会、ゴルフ会、ハイキング、小旅行等があるとしますので、皆様のご希望をぜひお聞かせ下さい。一度に沢山のことは不可能かも知れませんが、なるべく皆様のご希望に沿うように企画したいと考えますので、どのようなことでも結構ですので左記宛にお寄せ下さるようお願い致します。

〒223 横浜市港北区新吉田町一五一〇

ライネスハイムー—一〇六

川守田 孝 平

TEL 〇四五—五三一—六〇六三

北海道ふるさと会連合会

親睦旅行参加者募集

道南会が加入している北海道ふるさと会連合会では、毎年親睦旅行会を実施しております。昨年は福島のフルーツラインで果物狩りに興じたあと、高湯温泉郷に泊りゆつたりとお湯につかりました。翌日は裏磐梯の五色沼周辺を散策、昼食のあと猪苗代湖畔を通り野口英世記念館を見学、途中バスの中でも和やかな時を過し、楽しい旅を終えました。今年も左記の通りに開催しますので、皆様お誘い合せて、またご家族とご一緒にぜひご参加下さいませんか。

日時 平成五年十月二十三日～二十四日

(土、日)

行先 群馬県水上温泉「ホテル聚楽」

費用 約三万六千円

定員 八〇名

※北に谷川岳の雄姿を望む水上温泉に宿泊、翌日は、谷川岳ロープウェイで標高一三二一mの天神平まで登ります。帰路の途中でりんご狩りをお楽しみ頂く予定しております。

思い出のアルバム

平成五年 新年総会

於 日本工業倶楽部

平成5年1月29日(金)



伊丹さん
西川さん
松岡さん
能味さん



荒木さん
中村さん
田辺さん
葛西さん



能味さん
山下会長
武内さん



千葉さん
山本さん
加藤さん
三国さん



相鳥さん
梅田さん
谷口さん
山田さん
久保田さん
室谷さん
中山さん



島田さん
本間さん
山本さん
福田さん
川守夫人



三東さん
岩城さん
沼崎夫人
能味さん
沼崎さん
白井さん
小森さん



稲葉さん
谷口さん
比嘉さん
山木さん
梅田さん
山田さん
中山さん
武藤さん
安島さん



島田さん
川守田夫人
山木さん
上田さん
笠原さん
坂垣さん
千葉さん
梅田さん
室谷さん



山田さん
梅田さん
室谷さん
中山さん
和田さん
川守田さん
板垣さん



山田さん
室谷さん
中山さん



稲葉さん
小室さん
比嘉さん
山田さん
久保田さん
中山さん



梅田さん
板垣さん
中山さん
谷口さん



稲葉さん
上田さん
一戸さん



函館市東京事務所のスタッフ

岩船所長
比嘉さん
久副所長



篠崎さん
小室さん
染木さん

あとがき

七月十二日夜、突如として起きた北海道南西沖地震で、奥尻島が壊滅的な被害を受けました。地震発生直後の火災、そしてあつという間に襲ってきた津波の恐しさをテレビ放送でまざまざと見せつけられ、只々驚くばかりでした。奥尻島をはじめ大成町、北松山町の皆さんに心からお見舞いを申し上げます。

この会報「道南」の発行がいろいろな事情で暫く滞っておりますことを皆様にお詫び申し上げます。事務局では、会報の発行をはじめ会の運営を円滑にするため、幹事を若干増やし、新しい企画などを検討、会員の皆様に親まれる道南会にしたいと考えておりますので、よろしくご協力の程をお願いいたします。

平成5年7月20日

会報「道南」No.24

発行所 〒107東京都港区赤坂1-1-17

細川ビル805号

北海道道南会事務局

☎03-3583-7947

印刷所 〒101東京都千代田区美倉町10

株式会社 ソーラン社

☎03-3256-7841